

郷土博 通信

No.22

2023 秋



「内間銅鐸」

CONTENTS



- 『内間銅鐸』 1
- 展示室の紹介 2~3
- 内間銅鐸と福家惣衛 4~6
- 陶芸体験講座 7
- ロビー展示の資料紹介 8

第1展示室

(展示期間:10月～3月)

自然災害関係資料を読む、伝える、活かす

関東大震災(1923:大正12年9月1日)から今年で100年目を迎えました。また最近では、近い将来に想定される南海トラフ巨大地震が及ぼす影響とその対策について真剣な検討が進められています。今回の展示では当館所蔵資料を中心に自然災害関係資料を紹介します。

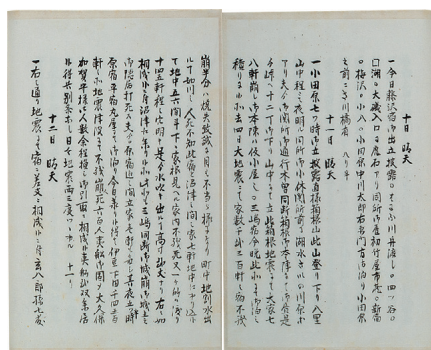
1854(嘉永7・安政元)年11月4日朝、関東から東海地方にかけて大地震(安政東海地震)が起きました。その翌日には南海地方でも大地震(安政南海地震)が発生しました。両日の地震は、江戸時代の南海トラフ大地震のひとつです。この時、讃岐金刀比羅宮の別当・金光院の住職一行25人は江戸に滞在していました。随行した側役によって記された『江戸御供道中記』(図1)によると、4日朝、宿泊先の屋敷にいた一行は、地震に驚いて屋敷から門前に飛び出した、とは書いているのですが、深刻な震災被害を感じてはいないようで、8日には江戸を出発し、讃岐に向けて東海道を下り始めました。11日に宿泊予定だった三島宿(静岡県三島市)では、地震によって家屋のほとんどが倒壊し、その半数が火災で焼失していたため、同宿を通過して原宿(静岡県沼津市原)に宿泊したとあります。その後の道中も多くの宿場が被災し混乱しているなかをどうにか帰国したのでした。

翌1855(安政2)年10月2日、関東地方南部で大地震が発生しました。水戸藩の学者・^{ふじたとうこ}藤田東湖が圧死したことで知られる安政江戸大地震です。この地震について、戯作者の^{かながきろぶん}仮名垣魯文が、版元(出版者)の依頼を受けて『安政見聞誌(上・中・下3冊)』(図2)を木版刷りの本として刊行しました。商家の地下に造られた^{こうじむろ}糺室が地震の揺れで陥没し、母と子が生き埋めになったリアルな状況などを文章と絵で紹介したことから、江戸時代の地震ルポルタージュ文学の傑作とされています。

1923(大正12)年に起きた関東大震災の時には、大日本雄弁会・講談社が『大正 大震災火災』と題して、文章に加えて写真80ページを盛り込んだ震災記録を活版印刷で刊行して40万部を超えるベストセラーとなりました。

このようないわゆる文献資料だけでなく、自然災害の状況や教訓を記録した石碑や記念碑も全国で数多く見られます。大阪市大正区には「大地震両川口津浪記石碑」(図3)という安政東海地震に関連した石碑があり、地元の保存会によって、被災者の強い思いを次の世に伝え、命を守る運動が続けられています。こうした動きに連動して、2019(令和元)年3月には国土交通省の国土地理院が、「自然災害伝承碑」の地図記号(㊦)を新たに作りました。地図上に伝承碑の存在を明示することで、地元住民だけでなく、広く一般にも過去の災害の教訓を知ってもらい、防災・減災意識の向上に活かそうとしています。

(齊藤 祐司)



▲図1 『江戸御供道中記』



▲図2 『安政見聞誌(中)』



▲図3 大地震両川口津浪記石碑

第3展示室

(展示期間:10月～3月)

讃岐の銅鐸

銅鐸は弥生時代に国内でつくられた青銅器で、祭祀に使用され、はじめは木などに吊るして、ベルのように鳴らしていたと思われます。内側に舌と呼ばれる小さな棒をぶら下げ、内面裾にある突帯(図1)と触れ合わせることで音を出していました。現在の青銅器は錆びて青緑色をしていますが、製作してすぐは金色のような色をしています。輝く色と甲高い金属音は、当時の人々にとって神秘的だったことでしょう。



▲図1 内間銅鐸内面裾の突帯

時代が下ると銅鐸は次第に大型化し、吊り手も装飾化されていきます。それとともに楽器としての実用性も失われ、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと変化したと考えられています。

香川県内からは20点程出土したとされていますが、現在、実物が確認できるのは14点です。そのうち、全体の形が残されているものは10点、破片の状態のものが4点です。今回の展示では、本年3月に当館へ返却された内間銅鐸(表紙参照)を中心に、讃岐の銅鐸をご紹介します。

綾川町陶内間で出土した内間銅鐸は高さが29.7cmあり、文様は斜格子文の縦帯と横帯を直交させて4つに区画された袈裟(けさだすき)文です。1926(大正15)年に出土し、1930(昭和5)年に当館へ寄贈されましたが、その数年後には行方が分からない状態になってしまいました。しかしながら、当時の当館職員である岡田唯吉による出土状況記録



▲図2 「綾歌郡陶村銅鐸発見状況ノ大概」

(図2)と拓本(4頁図1)が当館に残されていたため、県内の銅鐸を紹介する際には、必ずと言っていいほど内間銅鐸の名が挙がっていました。

このような所在不明の状況が続くなか、2021(令和3)年9月になって、東京国立博物館(以下「東博」という)で保管されていたことが分かりました。来歴不明の状態で長らく保管されており、数年前から東博において来歴の調査をしていたところ、もとは鎌田共済会郷土博物館が所蔵していたことが明らかとなった、との連絡をいただきました。地元で活用するのが一番であるとの東博側のお考えを受け、このたび郷土の皆さまにご披露する運びとなりました。

県内出土の銅鐸は数が少ないうえ、個人や県外で所蔵されているものもあるため、実物を見る機会は限られています。当館では、今後、常設展示を予定しておりますので、より多くの方々にご覧いただき、郷土の歴史を身近に感じていただければ幸いです。

(宮武 尚美)

内間銅鐸と福家惣衛

はじめに

“^{うちまどうたく}内間銅鐸”が約90年ぶりに、東京国立博物館（以下、「東博」という。）から当館に戻ってきました。

この銅鐸は1926（大正15）年3月、^{あやうたすえ}綾歌郡陶村（現在の綾川町陶）字内間で発見され、4年後に鎌田共済会に寄贈されました。

翌年には京都帝国大学の梅原末治や鎌田共済会の岡田唯吉によって発見の経緯、実物の観察記録や拓本（図1）が作成され、1933（昭和8）年に考古学専門雑誌に紹介されましたが、それ以降記録は見当たらず、実物は所在不明となるのです。

再びこの銅鐸が取り上げられるのは、1950（昭和25）年福家惣衛が著した『香川県美術史』で「帝室博物館に納まったとのことである」と書き記していますが、その4年後の論文ではその博物館には「存在しない」と断言しています。

いったい、この銅鐸は何処へ行ったのでしょうか。

福家の記述を通して、内間銅鐸の行方を探ってみます。



▲図1 内間銅鐸の拓本

1 福家惣衛とは

福家惣衛は明治～昭和時代に活躍した教育者・行政職員・郷土史家です。

1884（明治17）年陶村と同郡の滝宮村に生まれます。県師範学校時代に荻田元広教諭の奨励で郷土史研究に関心を持つようになり、卒業後は1909（明治42）年師範学校教諭に就きます。

1920（大正9）年、36歳の時香川県初の社会教育主事となり、翌年香川県史蹟名勝天然記念物調査会の規程を作成するとともに委員に就任します。岡田もこの時委員になっています。

1924（大正13）年1月、文部省の勧めで熊本県の社会教育主事に転任し、6年間勤務した後欧米視察などを経て、1932（昭和7）年大川中学校長兼教諭として香川県の教育界に復帰しました。

その後、香川県立丸亀高等女学校長を務めるとともに、香川県史蹟名勝天然記念物調査会委員や県史編纂委員会常任委員などを歴任します。1941（昭和16）年58歳の時教育関係の職を全て



▲図2 福家惣衛（前列左）と岡田唯吉（前列右）

辞し、以後は鎌田共済会職員、丸亀市議会議員や各種団体の委員などを務める一方、執筆活動を精力的に行っており、教育や歴史に関する著作は数多くあります。1971（昭和46）年、87歳で亡くなります。

福家と銅鐸とのつながりについては、銅鐸研究でも知られる歴史学者の喜田貞吉や考古学者の梅原と親交をもち、1924（大正13）年3月発刊の『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二で、「銅鐸」を執筆し、県内出土の銅鐸や三豊郡^{いちのたに}一谷村^{ふるかわ}で出土した「古川銅鐸」について考察しています。このように30歳代から既に銅鐸に強い関心を持っていたわけで、このことが以下に取り上げる内間銅鐸所在に関する2つの記述につながっていくのでしょう。

2 埋蔵物と遺失物法

最初に『香川県美術史』を見てみます。解説の最後は次のような記述です。

（内間銅鐸は）鎌田共済会の調査室に置き、当時余もここで実物を見て拓本など撮つたが、その後出土物発見の手続きを取って、帝室博物館へ納まったとのことである。

鎌田共済会の調査室とは鎌田図書館（現在の郷土博物館）2階に設けられていた部屋の一つで、その名のとおりに資料を調査する部屋です。ここには拓本用具などが常備されていたので、ここで実物を見て、拓本をとった云々の記述は信頼できるものでしょう。

これに対して、後半部分は「納まった^{●●}とのことである」と“伝聞調”なのは気になります。



▲図3 福家惣衛著『香川美術史』

出土物（埋蔵物）発見の手続きとは、「遺失物法」の規定を指します。銅鐸などを土中で見つけた場合は、道でお金を拾った時と同じように、警察に実物を添えて届出をしなければなりません。警察は発見の年月日・場所、発見状況や物品の形状などを聞き取ったのち、公告をします。

その埋蔵物が、学術的・考古学的な価値が認められ、所有者が判明しない場合は、その所有権は国庫に帰属すると同法第13条に規定されていますので、これに該当しそうな案件は、さらに詳細な書類が作成され地方から国（昭和20年以前は内務省）に連絡され、書類や実物審査がなされ、価値があると判断した場合は国が相当価格を発見者に支給し、実物は博物館の所蔵となり、展示などで活用されることになります。

帝室博物館（以下、「帝博」という。）は国立博物館の旧称で、東京・奈良・京都の三館がありました。ここはおそらく現在の東博を指していると思われ、そこにはこのような手続きを経て収集された数多くの考古資料が収蔵されています。

次項ではこのような手続きを経て帝博に納められた県内の実例を紹介します。

3 銅鐸・銅剣が500円

1927（昭和2）年、現在の三豊市高瀬町大字羽方^{はかた}の小谷池の堤近くから、銅鐸と銅剣が発見

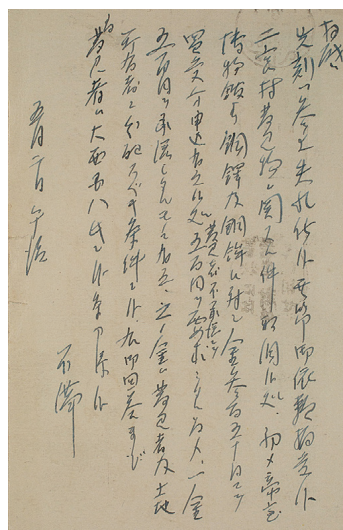
されました。「羽方銅鐸・銅剣」と呼ばれて、現在東博の所蔵品となっています。

発見当初の調査は鎌田共済会の岡田が担当したようで、この関係からか岡田宛に価格交渉結果を報告したハガキ（昭和3年5月2日付）があり、当館に保管されています。

その要旨は、当初帝博は銅鐸・銅剣に350円の価格を示したが、発見者は不承知で500円を要求し、帝博がこれを承諾して交渉が成立したというものです。

法の規定に沿った手続きを経たものであれば、このように関係機関にそのことを示す何らかの書類が残されている可能性が高いでしょう。

内間銅鐸もこのような手続きを経て帝博に収納されたと福家は述べていますが、関係書類は現在のところ見つかっていません。



▲図4 価格交渉を記すハガキ

4 東京博物館に存在しない

第二次世界大戦後の混乱も治まった1954（昭和29）年、鎌田共済会の機関紙『郷土文化』が創刊されました。その創刊号に福家は「坂出の古代文化」と題する論考を寄せています。

その中で内間銅鐸の所在について「東京博物館へ納めたとのことであるが、現在は存在しない。」と4年前とは正反対のことを記しています。恐らく東博に照会した結果、「存在しない」という回答を得たことなのでしょう。すると、内間銅鐸は正規の手続きとは異なる流れで東博へ持ち込まれ、そのままになったということなのでしょう。

おわりに

福家は1965（昭和40）年、82歳の時に郷土史研究の集大成とも言える『香川県通史 古代中世 近世篇』を著します。この中で印象深いのは巻末の「追記」です。

本書編集後に発見された考古学上の重要事項として3点を取り上げています。うち2点は県内の古墳の紹介ですが、残る1点は1964（昭和39）年神戸市で発見された「桜ヶ丘銅鐸・銅戈群」について詳述していることです。この資料は出土点数が多く、銅鐸には絵画があるなど考古学的に貴重なものですが、香川県の歴史書の追記としてこれを取り上げていることから、銅鐸への関心をいまだ持ち続けている福家の姿が見えてきます。

これに対して、本文中の内間銅鐸はわずか3行の説明で、その所在については「坂出市坂出町の鎌田勝太郎に保管されていた」とあるのみで、何かあきらめを感じさせる表現になっています。

（館長 大山 眞充）

【引用・参考文献】

- ① 関 秀夫『博物館の誕生』岩波新書 2005
- ② 福家惣衛『香川県美術史』文化同好会 1950
- ③ 同上「坂出の古代文化」『郷土文化』創刊号 財団法人鎌田共済会 1954
- ④ 同上『喜寿と金婚記念回顧録』文化同好会 1961
- ⑤ 同上『香川県通史 古代中世近世編』上田書店 1965
- ⑥ 時枝 務『遺失物法と文化財保護』『明治聖徳記念学会紀要〔復刻第46号〕』2009
- ⑦ 香川県教育委員会編『新編 香川叢書 考古編』1983

陶芸体験講座

黒田陶房 黒田 大 先生
黒田 真里子 先生

「作ろう!! My 抹茶茶碗」を終えて

黒田 真里子

今回制作した抹茶茶碗でいただく抹茶の歴史は大変古く、鎌倉時代に中国から日本に伝来したと考えられています。

当時のお茶は貴重品で高価なものだったため、身分の高い人など限られた人のみが口にすることができる嗜好品として流通していたそうです。

その後、安土桃山時代になると千利休ら茶人へと受け継がれ、一つの文化として確立されました。茶人により茶道は発展していき抹茶茶碗をはじめとした茶器などの価値が高まりました。現在も茶器は美術品として大切に扱われています。

抹茶茶碗は季節によって形が違います。寒い季節には温かいお茶を楽しむため口径の狭い『筒茶碗』、また暑い季節にはお茶が冷めやすい様に口径が大きく広がった『平茶碗』がありお茶をおいしくいただくため、そしてお客様への「おもてなしの心」として様々な形状の抹茶茶碗が誕生しました。

今回の講座は鎌田共済会博物館の職員の方から依頼があり、皆さんと土をこね、抹茶茶碗を成形し、デザインするお手伝いができることをとても楽しみにしていました。

講座では合計21名の方が参加してくださいました。陶芸をされるのは初めてという方ばかりでしたが、親子や友人同士で工夫したり、お互いにアドバイスしあったりしながら楽しく制作していただきました。

それと同時に、先人の作家・職人達の制作における苦勞やすばらしさに思いを馳せた1日になったのではないのでしょうか。



①作り方の説明や、陶器の焼き方や釉薬についてのお話をしました。



②粘土の板を素焼きの型に覆い、形作りします。お互いに協力しながら制作しました。



③完成した作品の一部。色は鉛釉薬・織部釉薬・乳白釉薬の3種類の色を選んでもらいました。焼き上がりが楽しみです。

井上通女の『帰家日記』

(ロビー展示資料紹介)



『^{きか にっき}帰家日記』は江戸時代中期の女流文学者、井上通女^{いのうえつうじょ}が著した上・中・下から成る全3巻の紀行文です。

通女は1660(万治3)年、丸亀藩士井上儀左衛門の長女として丸亀城下に生まれ、儒学者でもあった父から和歌、物語、漢学を学びました。更には薙刀の免許皆伝を許され、文武両道の才媛である、と藩内でもその才能と実力が高く評価されます。この噂が丸亀藩二代藩主^{きようごく}京極高豊の母である養性院に届き、1681(天和元)年22歳の時に江戸へ出仕しました。養性院のもとで仕える傍ら室鳩^{むろ}巣^うら著名な学者文人とも交流し、その才女ぶりを発揮したといわれています。

しかし、1689(元禄2)年に養性院が亡くなると、通女は帰郷することを決意しました。正徳年間(1711年から1716年)に刊行されたとされる『帰家日記』は、その19日間の道中記です。江戸を発ち、東海道を経て瀬戸内海を舟で下り丸亀へ帰着するまでの様子が記されています。「今宵は赤坂^{※1}にやどる」で始まる宿の女房と通女、ともに古典文学に素養のある2人が語り合う場面は特に秀逸で、古典学習の教材として目にされた方もおられるでしょう。宿の女房の郷里が三河八橋^{※2}であることから、『伊勢物語』の八橋の場面へ会話が発展するところは、通女の知性の豊かさや機転の利く様があらわれています。

通女作品は、源氏物語や枕草子など平安時代の優雅な言葉使いにならった擬古文体で綴られており、国風文化を代表する作品の名場面・名句を読み手に想い浮かばせる、という遊び心に富んでいます。『帰家日記』は和歌と漢詩を交えた一代の名作であると称えられ、江戸時代の女性が記した日記文学として多くの人に親しまれました。

「讃岐の紫式部」とまでいわれた井上通女は、丸亀市立

城西小学校の前に銅像が、香川県立丸亀高校には記念館が設けられており、郷土の文学者として現代まで語り継がれています。
(矢野 愛)



▲井上通女の銅像

- ※1 赤坂：東海道の36番目の宿場、赤坂宿を指す。現在の愛知県豊川市。
※2 三河八橋：現在の愛知県豊田市にある『伊勢物語』「東下り」の段の舞台。

参考文献

井上通女全集修訂委員会『井上通女全集』(1973.11.1)

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日：月曜日／祝日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入館料：無料